

京都市立明德幼稚園「最優秀園実践発表会」 開催レポート

2022年9月7日（水）、2021年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した京都市立明德幼稚園による、「最優秀園実践発表会」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のためZoomミーティングによるオンラインで実施いたしました。南は沖縄県から北は北海道までの認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・中学校・大学等の教育・保育関係者から異業種の方も含めて約200名（端末数）お申込がありました。

以下に明德幼稚園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：2022年9月7日（水） 14:30～17:00 〈オンライン開催〉
2. 主題：つながり 対話することで 深まる思考
3. プログラム
 - 1) 開会式 14:30～14:35
 - 2) 実践発表 14:35～15:15
 - 3) 協議会（グループセッション）グループ発表 15:15～15:47
 - 4) 記念講演 15:47～16:50
演題「“科学する心を育む保育”『明德幼稚園』の実践に学ぶ」
講師 学習院大学教授 東京大学名誉教授 秋田 喜代美 氏
 - 5) 閉会式 16:50～17:00

実践発表 つながり 対話することで 深まる思考

本園は京都市の北東に位置し、比叡山を望む自然豊かな環境にある2年保育の園である。2020年度は「思いを寄せる～自然とつながる『きっかけ』に着目して」というテーマで生き物に思いを寄せて心が動くことが探究心や思考を深めるといった科学する心の芽生えになるのではないかと考え実践研究をしてきた。また自然とつながり思いを深めるためにはきっかけとなる要因があると考え探ってきた。きっかけとなる要因には自然そのもの・ICTの活用・家庭との連携など複数挙げられるが、2021年度はその要因の中でも多くの実践事例の中で関連性があった“人とのつながり”に着目して思考を深める過程を探っていた。

▼4歳児の実践発表

4月より継続して研究や保育に関わっていただいている岩倉自然学習ボランティアのM先生から



蝶オオムラサキのさなぎをいただく機会を数回設けた。初めて羽化した際には美しい青紫の羽の蝶を皆で放蝶した。次に羽化した時に、子どもたちは前の蝶との色や斑紋違いに気づいた。蝶の画像を大型テレビに映し、友達と比較しながら対話をする中で様々な視点に気づいていく。年長児から、斑紋の違いは“オス”“メス”の違いではないかという新たな視点を教えられ、図鑑と比較しその蝶はメスであると確信した。しかし、別の5歳児がその蝶を見て、“きれいな方がメス”と言っていた。そこで再び図鑑と

比較し、“きれいな方がオスであった”と確信し、きれい＝メスという概念が覆る。次に「なぜオスの方がきれいかという新たな疑問が生まれ、生き物博士と慕う5歳児に尋ねに行く。その5歳児は「メスに好きになってもらうためじゃない」というと、皆が納得した。4歳児が教師の適切な援助を受けながら友達や5歳児と対話を重ね生物の本質に気づく実践事例であった。

2022年度はM先生よりオオムラサキの幼虫を園の榎の木で育てていただき、4歳児の保育室で羽化する様子を見ることができた。

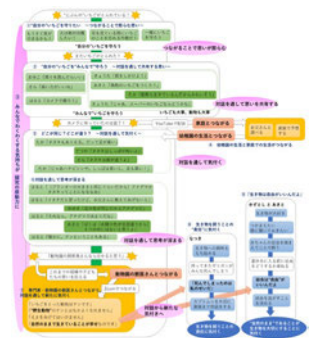


▼5歳児の実践発表



4歳児の冬に一人ずつ個人持ちの植木鉢にイチゴの苗を植え、5歳児の春、実がなるのを楽しみにし大切に世話をしていた。ようやく実がついた矢先、何者かにイチゴが食べ散らかされていた。クラスでイチゴを守る方法を考え、おとり用のイチゴと夜間のビデオの設置が決まった。翌日、ビデオにイチゴを食べに来た動物が見事に映っていた。子どもたちには“映っていた動物は何か”という疑問が生まれ、保護者にも動画をYouTube配信し、家庭で共有し親子で何の動物だろうとわくわくしながら対話生まれることを願った。動画は子どもたち

がパソコンで自由に見て調べることができるようにした。図鑑に記載される大きさと、動画の画像から予想される大きさをタフロープで比較したり、家庭からの様々な動物を予想する意見があったりしたが、決め手にならない。そこで、子どもの動物園の人ならわかるのではという言葉から、動物園の獣医さんとオンラインでつながることになった。その機会、正体は「テン」であるとわかり、また、「野生動物とは仲良くなれない、餌を与えてはいけない、それが野生動物の幸せである」ことを教えられた。また、教師が予め獣医さんに、子どもたちが頑張って調べてきたことを認めて欲しいとお願いしたことで、獣医さん



に褒めていただき、子どもたちの努力が報われ自信にもなった。

その後、ザリガニや虫を捕まえた子どもたちが、「生き物は自由がいいんだ」と言いながら逃がす姿があり、獣医さんとの対話から“生き物の幸せ”という新たな視点が生まれ、深く学ぶ姿となった。

このような過程で、友達や教師、家庭、獣医さんにつながり、一体何の動物だろうとわくわくしながら対話を重ねていくこと、探究が深まっていく原動力にもなっていると思われる。

2022年度も、5歳児のイチゴが同様に食べられる事件があった。4歳児だった昨年度、5歳児の様子を知っていたことから、食べた動物は“テン”ではないかと予想し、皆で話し合いビデオカメラや餌を置き、撮影を試み、何日にも及んでようやく成功した。映った動物は4匹で、そのうち1つは明らかにカラスで、他は見当のつかない3匹の動物が映っていた。また、食べる動きがよく映っていた動物には、顔にテンとは異なる特徴があり、子どもたちは図鑑とパソコンの画像を比較し表にまとめ、様々な意見を出し合い調べ、“ハクビシン”と結論付けた。そのタイミングで、編集した動物の撮影動画を家庭や昨年5歳児だった1年生にもYouTube配信した。動画を見た家庭や1年生からは気づいたこ



とを紙やメールで送ってもらい掲示し、そのコメントを皆で共有した。その後、残り 2 匹の正体不明の動物を突き止めるべく、子どもの意見から動物園の人に聞くことになりオンラインでつながった。動物はテンと猫であることがわかり、また、自分たちが今まで調べてきた過程を認めてもらい、自信となった。子どもたちは、対話を通して様々な視点で表や図鑑を活用して比較したり、判断したりしながら思考を巡らせ、深く探究していく姿となった。また動物園の方とのつながりで納得できたことで、モヤモヤした気持ちが満足感へと変わった。

▼まとめ

子どもたちは、抱いた疑問や知りたい思いや欲求を満たすために、信頼できる身近な人とつながろうとし、また、知ったことを共有したい思いからつながろうとする。安心できる人間関係の中では、自分の思いを伝えることができ、対話が生まれ、複数の視点での比較や総合的に判断する必要性に気付き、思考を深めていく。

家庭や専門家とのつながりが、気持ちの継続や興味を持続、新たな視点をもつきっかけとなることがある。そのつながりが思考の深まりへとなるためには、教師の意図的な支えや援助が重要となってくる。

I C Tの有効な活用は、視覚的に共有できたり、実際に見られない場面を見て新たな気づきとなったりすることで、人とつながり対話を生み出すきっかけとなり、探究心を支えるためのツールとなる。

子どもたちは、身近な事象に心を動かし、思いを寄せ、信頼のおける“つながり”の中で“対話”を重ね、わくわく感をもって意欲的に目的に臨み、自らの“思考を深め”ていく、そのような過程が仲間と共に本質を探していく“科学する心”につながるのではないかと考えた。



協議会（グループセッション）グループ発表

▼協議の視点

- ・ コロナ禍ではあるが、自然とのかかわりの中で、「つながり」や「対話」を生み出す教師の援助や環境整備について、どのように工夫しているか。また、それによって子どもの気づきや思考の深まりが見られる実践について、話し合う。

オンラインによるブレイクアウトルームにて19グループに分かれて協議を行った。

▼協議の後の発表より

- ・ つながりや対話を生み出す援助が素晴らしい。子どもが考えるように促していく援助、そこに対話が生まれるまで待つことが大切である。I C Tの活用で動画を撮り配信し、保護者と共有することで、園の対話と家庭での対話がつながる。動画を見ながら探れるようになる。
- ・ 幼稚園の立地条件を生かし、子どもが探究するのをずっと待ちながら大事にしている。
- ・ 自園の実践で、大人が気づいたときに子どもに気づきの目が広がり、つながっていく事例がある。
- ・ 動物園や外部の方、地域の方の協力で、子どもの意欲や興味は膨らみ、対話を大切にしながら家庭や地域、専門家や先生同士でのつながり深めていった。
- ・ 自園で小玉スイカが何者かに取られてしまう事件が発生した。子どもたちは一致団結して思考力

を働かせていた。大人はとられた悔しさが強かったが、子どもたちは残っているものを守りたい思いで一致団結して話し合った。守りきって皆で食べたときに満足感が生まれた。育てていく中で思いを寄せていっていたのではないかと。明德幼稚園のイチゴを守る作戦に似ている。子どもたちを支えていく援助が大事ではないか。

- ・ ワクワク感について、どんなふう育てていくか、またその時の教師の役割、環境をどう生かすかは、悩みでもあるが面白みでもある。

記念講演 “科学する心を育む保育” 『明德幼稚園』の実践に学ぶ

秋田 喜代美 氏 / 学習院大学教授・東京大学名誉教授

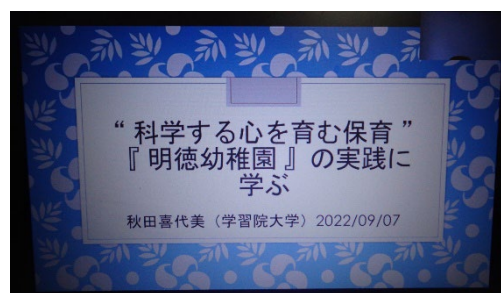
学習院大学教授、東京大学名誉教授 秋田喜代美氏に「科学する心を育む保育」『明德幼稚園』の実践に学ぶ」という演題でご講演いただいた。初めに、ソニー教育財団の「ソニー幼児教育支援プログラム」が20周年を迎えたことについて、日本の幼児教育の歴史にしっかりと成果を残し、歴史となることなどを引用を交えながら話された。

次に本園の2019年度からの研究テーマの深まりと本日の保育から、最優秀を受賞して終わりではなく新たなチャレンジを続け、今年度初めて藍の栽培と染色に取り組んでいる様子などを紹介された。

以下に、明德幼稚園の研究から学ぶ“6つの特徴”について話されたことを、講演内容に沿って6つの項目にまとめることとする。

①自然のとらえや経験の変化について…

自然とは未知なるもの、変化のあるもの、自然との出会いにより心が動き意欲が高まり学びに向かう力が総合的に育っていくのではと2020年度の論文にある。2021年には、M先生との出会いにより地域の自然の貴重性を知り、教師自身自然の捉え方が変化する。園の壁を越えて、自然というものを地域全体として捉え、その中で子どもたちが経験したいことを考え日々関わり、エコシステムとして深く捉えていくことで自然の本質に向き合う。生き物に思いを寄せて、オスとメスという自然の本質と向き合う子どもたちの理論、専門家と出会うことで、生き物の幸せという本質的な自然に気づき、自分たち自身が丁寧に語り合い探究し、構成し直す、そして、教師も向き合い、自明を疑い、当たり前を問い直している。



② 多様な人との出会い、つながりと対話を通じた思考の深まり…

まず順序性が素晴らしい。クラス内、年長と年少、生き物博士、クラスを超えた教師間の同僚性、家庭とのつながり、専門家とのつながりがある。専門家とは知識の提供だけではなく、十二分に子どもたちが議論したり、家庭で語り合ったりしてわからない、じれったさの後で教えてほしいという意欲の高まりの中でつながりから出会う。専門家に子どものプロセスを認めてもらい自信につなげることも大事にしている。そのつながりをもつタイミングは、子どもの探究を見とる教師の専門性である。

③メディアの有効な活用 共有化 個人の経験を皆の経験に 積み重ね…

自然へのかかわり方は一人一人異なる。よく見てよく考えるために多様なメディアを有効に使っている。答えを与えるのではなく、考えるためのツールとしてメディアを大事にしたい。子ども自身が整理できるようなパソコンや表をうまく組合せ、考える足場をかけてあげている。また、子ども自身がメディアの特性を理解し、その可能性を感じ取り大人に要求する場面もある。ICTが特別な体験ではなく日常の

道具になっているからこそ、子どもは特性を理解し、教師自身も時期や形態を経験から知り使い方の有効性を深めている。Slow Pedagogy の観点からも、ICTが新たな遊びや保育を生み出す創造の道具となっている。

④一人一人の子どもの言葉・思い（心の動き）を丁寧に読み取る保育者の専門性…

子どもの思いを大事に考え、思考だけでなく、情動、揺れ動く心を読み取ることが日本の保育者の専門性を支えている。事例を図式化した記録から、子どもの言葉からどのように心が動いているかを捉え、整理し、意識化している。対話の深まりが明らかになる。また、教師の迷いやうまくいかないときなどがあり、ジグザグした過程を日常で大事にしてきたことが大きく働いている。

⑤子どもの深まる思考や心をとらえる保育者の研究・探究の記録の深まりと工夫…

細やかなエピソードや記録は整理しにくくなりがちである。だが、構造や意味を考えテーマに沿って振り返り図式化している。エピソードごとに図にして整理することで、問いたいことがどう見え、子どもがしていることの意味は何かを読み取っていく。エピソードから探究のつながりが生まれるがそれを支えるのは保育者のワクワク感である。保育者も心に残るエピソードを事例に整理し、楽しんでいることを共有したい、それをどうすれば伝えられるか考えている。

⑥実践の価値 上手いかわからないことを見守る、待つ、信頼して任す保育の流れが、子どもたちの探究や思いを生む…

直線的でない感情、もどかしい、もやもや、知りたいのにわからないなどのジレンマやじれったさが幼児教育が大事にしている醍醐味であり、科学するということが近代科学の効率性だけではない環境を生んでいる。明德幼稚園の保育からこれらのサイクルを考えると、場を考え、人との出会いや対話から環境を仲立ちするメディアをうまく利用しながら思いや心の動きを読み取り、いろいろな形で記録の工夫や意味付けを、自分たちが大事にしている保育における価値を考えているということになる。

アリソン・クラークが提唱する Slow Pedagogy とは、ペースがゆっくりというだけでなく、夢中になっている急速で強い感情に巻き込まれるときも含まれる。個人だけでなく集団の探究を祝福する、遊びと今ここに価値を置く。早く進む効率や効果だけではなくゆったりすることが大事であり、本園の科学する心につながる。また、Slow Pedagogy の7つの要素からも本園の実践を分析された。また、Slow knowledge、Slow Looking の視点から、短期的に問題を解決するだけではなく、身近な人と親密に対話をしていくことが乳幼児期の教育で培われることが、小学校への架け橋をかけることになる。

20年を迎える「科学する心」の原点、「成人になっても子どもの心を忘れない」、ソニーが大事にしてきた「独創性・創造性を忘れるな」、そのことが問われている。チャレンジ精神をこれからも大事にしたい。